

# かけはし

教育学研究科  
静岡大学 教職大学院  
NEWSLETTER

No. 2

2016年10月1日

静岡大学教育学研究科・教職大学院 〒422-8529 静岡市駿河区大谷 836 TEL 054-258-4701(山口研) URL <http://www.dapse.ed.shizuoka.ac.jp/>

## 巻頭言

## 教職大学院に期待すること

水元 敏夫

(静岡県教育委員会事務局教育監)

「壮大な実験」。「かけはし」第1号で菅野研究科長が表している様に、初めて「教職大学院」の制度創設の構想を聞いたとき、期待や戸惑いを込めて、そのように感じたのは私だけではないと思います。

そこでは、機関相互の関係も、現場との連携も、そして院生や教員の陣容や構成も、その壮大な実験を構成する重要な要素となっています。

ただし、現場とは言いますが、私たち教育行政サイドはこれまで、教員養成の現場にどのように関わってきたでしょう。実際に養成の現場を見たり、養成の現場の声を聞いたことがどれほどあったでしょう。

このことは、養成側の大学側にとっても似た状況であったのかも知れません。仮に行政現場という言葉があるとするならば。

教育改革が叫ばれる中、大学も含めて学校の慣性の大きさが抑えられます。そのこと自身を私たちは十分謙虚に受け止めなければなりません。一方で、教員育成という慣性座標系で見たとき、教職大学院は、一見、多様で複雑な事柄も極めて単純に整理できる一つの好事例であると思います。

となると、制度創設から約10年が経過し、今後、教職大学院はどのような期待を背負って前進をしていくのでしょうか。

一つには、関係機関による更なる相互評価により、場や仕組みがより発展していくことだと思います。

その一つの試みとして、本県では、静岡大学・常葉大学の2者と県教委・静岡市教委・浜松市教委の3者が一体となって、教員育成協議会の在り方研究会がスタートしました。

この複数の養成機関と任命権者のマルチな関係性は、本県の特徴であります。その、一見、複雑な関係性があるからこそ、共有すべき重要な課題を最大公約数的な意味合いで抽出するという機能を発揮することが期待されます。その中で、採用や研修の一体的な改革について協議・検討されることも相互評価の現われと言えましょう。

もう一つは、個のレベルでの評価によるものです。教職大学院から多くの修了生が送り出されています。現職派遣教員であれストレートマスターであれ、その評価は、フォローアップも含め、個人の取組みや活躍のレベルでもなされるまでに蓄積されてきています。

かつて「壮大な実験」と称された実験の検証や評価は、ある意味で実験室の外でもなされるようになってきているのです。

教職大学院での学びの手法や学びの環境が、大学・学校、双方の現場で試験されています。

ここで学ぶ人たち、そして、ここを修了した人たちは、実験の継続者であると同時に被験者であるとも思っています。その意味でも私の期待は尽きません。



9月13日に行われた静岡市教育委員会・常葉大学教職大学院・静岡大学教職大学院による静岡市教育懇話会



静岡県総合教育センター主催の研修「ユニバーサルデザイン（以下、UD）の考え方を生かした授業」に参加しました。午前中はセンター指導主事による講義・演習と実践発表、午後は筑波大学附属小学校教諭の桂聖（かつらさとし）先生による講演と授業づくり演習が行われました。静岡県では、UDの考え方を生かした授業づくりを推進しています。UDとは、支援を必要とする子どもの増加や様々な障害特性に対応するための手段の一つです。通常の学級に在籍する児童生徒の6.5%が学習や生活の面で特別な教育的支援を必要としているという調査報告を受け、すべての子どもたちが学びの実感をもてるような授業実践を目指して取り組みを進めています。センター発行のリーフレット「ユニバーサルデザインでみんな楽しい！みんな分かる！みんなできる！」では、気になる子の視点に立って指導を工夫することが大切であるとし、「焦点化（授業のねらいを絞り込む）」「視覚化（文字や音声に加えて視覚的な情報を活用）」「共有化（一人一人の学びを伝えあい、広げ、理解を深める）」の3つが授業づくりのポイントとして挙げられています。これらの考え方を提案されたのが講師の桂先生です。桂先生の講演で印象に残ったのは、「授業のUD化を『すべての児童生徒が理解できる内容にするために、授業のレベルを下げる』だと勘違いされている人がいるが、そうではない。むしろ、授業のねらいをきちんと絞り込む（＝焦点化する）ことによって、授業の質は向上

する。」という言葉です。しかし、その「焦点化」が非常に難しいとおっしゃっていました。「焦点化」とは、この授業で何を教えるかを考え、焦点を絞ることです。言葉で言うのは簡単ですが、実際に行うには、教科の系統性をきちんと把握し、学習内容の本質を見極める力が求められます。また、学級にいる子どもの様子を把握し、つまづきを徹底的に想定することや、「教師の教えたいこと」を「子どもの学びたいこと」に変える工夫（しかけ）を取り入れることで、どの子どもも楽しく「分かる」「できる」授業に近づくことができると伺いました。この研修に参加して、授業のUDには、深い教材研究と児童生徒理解、工夫が必要なのだという事を再確認しました。これからは、目の前の子どもにつまづきに学びながら、「焦点化」「視覚化」「共有化」のポイントを意識した授業づくりを心掛けていきたいと思えます。



総合教育センターHPより

## 学びの宝石箱

### 生徒指導支援領域 M1 芦澤優樹

「子どもの姿と生徒指導の今日的課題」の授業の一環として、7月14日に本学の石田純夫特任教授が静岡市立大里東小学校で行った6年生の道徳の授業を参観しました。題材の絵本「ちいさいおうち」は、都会と田舎という2つの世界観の中で描かれたものです。紙芝居を用いた読み聞かせの後、子どもたちの自由で柔軟な意見を引き出し、共有しながら繋げていくトライアングルトークの授業スタイルに、子どもたちは引きこまれていきました。子どもたちからの感想を發表させた後、「主人公(ちいさいおうち)は自分勝手」という感想を取り上げ、そのことについて意見を出し合いました。子どもたちの本音(その子のもっている価値観)があふれだし、明確な結論は出しませんが、教師も揺れながら「考え

る道徳」が繰り広げられていました。事後検討会では道徳の教科化や価値項目について、石田先生、大里東小学校の先生方、院生で議論が行われました。「取り扱う価値項目を一つに決めて授業に臨むか」という点について、石田先生の理想と現場の実情との間で、白熱した討論がなされました。しかし、アプローチの仕方は違えども、目指している「子どものありのままの価値観を大切に、考える道徳」は共通していました。今回の学びを通して、「特別の教科 道徳」について、学校現場は、まだ手探りの状態で、悩みながら進んでいることを感じ、さらなる実践と試行錯誤を重ねていく必要があると感じました。



## 修了生奮闘記

静岡県立清水入江小学校 教諭 小笠原忠幸

3期生（H23～H24年度）教育方法開発領域

中島みゆきの代表曲「糸」を聞く度に、大学院で学んだ日々が思い出されます。「縦の糸」と「横の糸」。「縦の糸」は大学院の先生方、研究会や学会で出会った研究者の先生方です。「横の糸」は言うまでもなく、共に議論を交わし合った院生の仲間です。この「逢うべき糸」に出逢ったからこそ、「仕合わせ（幸せ）」な大学院生活を送ることができたのだと思います。

さて、現場に戻り早くも4年が経過しました。やはり、学校現場でも「縦の糸（管理職や行政）」と「横の糸（学年部）」がうまく縫い合わさなければ、子どもたちのよりよい教育にも自分自身の力量形成にも繋がりません。また、大学院でいくら理論や実践方法を学んでも、その学びをうまく生かせる環境、理解してもらえ人間関係を形成しなくては意味がありません。

学校現場においては、教育課題が山積しています。だからこそ、大学院での学びや人との繋がりを生かして課題解決に積極的に関わり、子どもたちや教職員にとって「仕合わせる（幸せを導く）推進針」となれるように日々自己研鑽していきたいと思っています。

静岡県教育委員会特別支援課 指導主事 本杉 和美

4期生（H24～H25年度）特別支援教育領域

私が教職大学院に入学した平成24年は、中央教育審議会でもインクルーシブ教育システムの構築について審議された年でした。「合理的配慮」や「基礎的環境整備」という言葉が学校現場にも届き始めた時期でした。

この時代の流れと合わせるかのように、教職大学院での学びによって、私自身の特別支援教育の視野が広がりました。講義では発達障害や他機関との連携等をはじめ、他領域の内容についても学ぶことができ、実習では異校種である幼稚園や小学校で子どもたちの支援について実習先の先生方と一緒に考えることができました。そして、何よりも教職大学院の先生方や院生との出会いは、特別支援学校のみで仕事をしてきた私自身にとって、新たな発見や多くの刺激を得る貴重な機会となりました。

修了後は大学院での学びを生かし、所属校で特別支援教育コーディネーターや新設校の開校準備の仕事に携わりました。そして、今年度は、県教育委員会に異動し、指導主事として任務にあたっています。教職大学院が大切にしている「理論と実践の往還」の重要性を日々感じています。教職大学院での学びに感謝しながら、これからも学び続けていきたいと思っています。

### 教職大学院での学び① ～アクション・リサーチへの取り組み～

特別支援教育領域 M1 水野靖弘

教職大学院での学びの一つとして、現場型実践研究（アクション・リサーチ（以下、A・R））があります。研究に際し、多くの実習校に御理解御協力いただき、実際に大学院生が学校教育現場に身を置き、個々が自らの課題意識と実習校や地域の教育課題とを連動させながら実践的研究に取り組んでいきます。研究過程では、大学院生や大学教員との報告会や発表会の場があり、研究の進捗状況や課題を確認しながら、以下のような流れで研究を進めていきます。1年次報告会（1年冬）では、1年間の学びと自己の成長を振り返るとともに、今後のA・Rの方向性を探ります。2年次構想発表会（2年夏）では、A・Rに取り組み始めた2年生が、①実習校の実態、②A・Rの取り組み内容と方法、③今後の課題などについて報告し、意見交換や助言を通して、今後のA・Rの展望を見出していきます。2年次中間まとめ発表会（2年秋）では、最終成果報告書の作成に向け、中間報告をすることにより、現在のA・Rの現状から、今後の課題やまとめに向けての方

向性などを明らかにしていきます。2年次成果発表会（2年冬）では、各大学院生の興味・関心・課題に基づいて追及したA・Rの成果を発表するとともに、理論と実践の融合を目指した教職大学院の2年間の学修の成果を今後の各地域の学校改善にどうつなげたいかを発表します。先日、2年生の構想発表会がありました。特別支援教育領域では、「教育的ニーズのある子の通常学級での『学びへの参加』を促進する早期支援」、「特別支援教育コーディネーターのSDQ<sup>※</sup>を活用した支援体制づくり」、「放課後子ども教室の実践を通じた子どもと地域の変容」、「特別支援学校における情動を調整しアクティブ・エンゲージメントを目指した支援」等に視点を当て、各大学院生が研究を進めています。3月4日には成果報告会を計画しています。成果報告をさせていただくことや意見交換を通して、学びを共有し、互いに深めていければと考えています。

※Strength and Difficulties Questionnaire の略称。子供の行動上の問題に関するスクリーニング尺度の一つ。



## お薦めします ブックレビュー

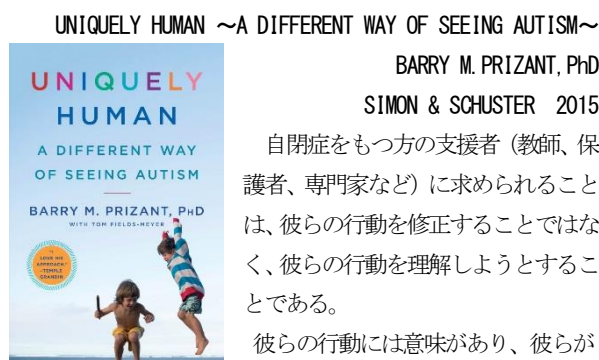


人はいかに学ぶのか 日常的認知の世界  
稲垣佳世子・波多野諠余夫  
中央新書 1989

本書では、「学習」とは外側からの強制によって行われるものであり、人は放っておくと必要な知識は獲得できないという従来の伝統的価値観を覆し、能動的で有能な「みずから学ぶ存在」としての人を実証的に描き出している。

今後求められるアクティブラーニングを実現させるためには、前提として、学び手である児童・生徒を能動的で有能な学び手と捉えることが重要であることを感じた。

(教育方法開発領域 M1 臼井)



UNIQUELY HUMAN ~A DIFFERENT WAY OF SEEING AUTISM~  
BARRY M. PRIZANT, PhD  
SIMON & SCHUSTER 2015

自閉症をもつ方の支援者(教師、保護者、専門家など)に求められることは、彼らの行動を修正することではなく、彼らの行動を理解しようとすることである。

彼らの行動には意味があり、彼らが世界と関わりをもったり、適応したり、コミュニケーションしようとしていると理解することである。つまり、変わるべきは支援者であり、本書は自閉症をもつ方の見方のパラダイムシフトを示唆している。

(特別支援教育領域 M2 深澤)

### <教職大学院からのお知らせ>

「実践研究ラウンドテーブル in 静岡 2016/ラーニングベース from 静岡 2016」開催のご案内

日 時：2016年11月23日(水・祝日) 10時から16時(受付は9時30分から)

場 所：静岡大学教育学部附属静岡中学校(静岡市葵区駿府町1番86号)

テーマ：子どもの未来を学校と地域で考える

内 容：小グループでの教育実践の語り合い、

学校と地域の連携・協働に関するミニ講演

対 象：教員および子どもの学びや育ちに関わる活動をしている人

定 員：80名(先着順)

申込み・問い合わせ 渋江かさね(教職大学院学校組織開発領域准教授)

eksibue@ipc.shizuoka.ac.jp

\*「地域に出て継続的に活動する静大教育学部生」が報告者を務める場を、「ラーニングベース」と名付け、ラウンドテーブルの中に位置づけて実施することになりました。



発行責任者	専攻長	山崎 保寿	編集後記 7月で1年次前期課程が修了し、大学院生活の4分の1が過ぎました。新しい環境と仲間に出会い、あっという間に過ぎていったような気がします。講義のない2か月の間、院生は思い思いの勉強や研究をして過ごしたことと思います。私自身も実習や学会への参加を通して、非常に貴重な学びができたこと実感しています。10月から後期課程が始まり、いよいよアクション・リサーチに向けた実習や研究も本格的に始まります。気持ちを新たに、取り組んでいきたいと思っています。(北住)
監修	担当教員	山口 久芳	
顧問	M2代表	松岡 龍吾	
編集長	M1	伊藤 智美	
副編集長	M1	臼井 秀明	
	M1	深谷 陽平	
	M1	水野 靖弘	
	ストレートマスター	芦澤 優樹	
	ストレートマスター	萩原 万葉	
発行担当領域(特別支援教育領域) 島野 聡子 野崎 弘之 北住 美來			
題字 ストレートマスター 北住 美來			次号発行担当領域は 教育方法開発領域です

